

棋才の心理学的考察

—特殊才能の研究—

倉 石 精 ^{※ a)}
藤 本 正 信 ^{b)}

I 序 言

本研究は特殊才能に関する研究の一環として囲碁の能力の心理学的分析を試みるのが目的である。この才能が素質として内在するものか、あるいはこの道に格別な意欲をもち、修業を重ねることによって形成されるものであるか、そのいずれに重きをおくべきかは、にわかには断ずることができないが、きわめて低年齢でこの才能の発現をみることがあることや、個人差の著しいことなどから、一応特殊才能として考察することにする。

特殊能力とか特殊才能などの概念を厳密に定義しようとするのは、なかなか問題の多いところであるが、ここでは漠然と所謂一般知能的因子よりも、特殊知能因子に負うところの多い能力としておく。

碁才が学令以前に発現し、成人の碁客を軽く打ち負かす幼児があることが古来から言い伝えられ、現にわれわれも、このような子どもに接することができる。彼等は、あらゆる面で標準児よりすぐれている所謂天才児とは趣きを異にし、碁才以外は平凡な幼児に過ぎない。この点も碁才の特殊性を物語るものと言えよう。

碁才が、幼少期より特殊な発達をすることがあると同時に、種々の才能に恵まれた成人達の中に、長年碁を愛好し、番数を重ねているにもかかわらず、いささかも上達しない人がある。野上彰氏は囲碁太平記の中で、学問的に非常にシャープな頭をもった人たちが、碁・将棋になると、どうしてあもわけがわからなくなるのかふしぎでしかたがないと述懐している。氏は著名な哲学者に10年間、何百局も碁を打って教えた。「碁もあるところまでは、ロジカルにロゴスの的に解決のつくものであり、語学と同じように、一つ一つの単語を覚え、その変化を知り、文章構成法に熟しさえすればすむところが多いのである。」にもかかわらず、この哲学者は、その都度誤まりを正しロジカルな説明をしてきかせる野上氏の苦心にもかかわらず、いささかの進歩もとげなかったという。この事例に似た人々を、我々も身近に経験できるのである。

ほとんど等しい条件でスタート・ラインに並んだ初心者が、その上達の過程で非常に大きな個人差を呈することは、大学の囲碁部の訓練などにしばしば見られるところである。個人差の著し

* a) 京都大学教授 b) 京都大学大学院博士課程

いことも、この才能の特殊性を裏付けるものといえよう。

もし碁才が素質的のものであるとしたら、心理学的にその構造をさぐり、この才能を予知する可能性はないものだろうか。これが本研究の出発点となるのであるが、我々は碁と縁遠い手段によって、これを始めようと試みた。碁の才能は碁を打たせてみれば判るというのでは、心理学的意味は稀薄になる。元来心理学的適性検査は、当該任務を遂行する以前に、将来の適合性や成就度を予見して、選別に役立てようとするものであり、たとえばパイロット適性検査は、一々被験者に飛行機の操縦をやらせるわけに行かぬので、できるだけそれに似た状況において、テストを試みるのが通例である。しかし囲碁の才能を予知する適性検査を試みようとする場合、囲碁と類似の状況をつくることに苦心をする必要がない。いつでも本当の碁を打たせることが可能だからである。しかし私共は、まず遠い関係から、これを予知する可能性について考えたいと思う。

専門棋士は現実には、たった一回の稽古碁で少くとも相手の現在の力量を正確に評価し、時としてはその将来性を予見する。所謂手筋の良し悪るしが、判断の基準になるようであるが、これが一回の勝負で判るのをいぶかる人がいる。たしかに限られた手数であるならば、その信頼性はうすいといえるであろう。たとえば懸賞詰め碁のようなものならば、教えられたことを鵜呑みにしただけでも、ごまかすことはできる。しかし一局の碁は100手以上の手数を要するものであり、しかもその一手一手をあらかじめ用意しておくことは可能ではない。すなわち100題にわたる着手の可否についてテストを受けていることになる。勿論その中には極めて平凡な問題も多いが、いくつかの問題の局面がある筈であり、これらの総合成績が棋力の判定となるわけである。

但し専門棋士の間でも、早期に高段者になれる人材を、たった一回の稽古碁で選別することは全くの推測に過ぎぬように取沙汰されている。しかしまた、一方では専門棋士でなくても、学生囲碁部の先輩が稽古碁で後輩の棋力を判定をし、将来性の予見をする場合も、相当な選別力があるともいわれている。専門棋士間では、勝負により番付面で昇進し、やがて高段者になれる人材や、名人、本因坊、最高位、十段等のタイトルを獲得できる人材の予見が問題になるのに対し、我々の興味はむしろ、専門棋士の最下位である初段に匹敵する棋力に到達できる程度の才能（素人棋士の5段^(注)）の解明にあるのである。

専門家の間でいわれている碁才は、現実的に勝負強さ、かけひき等人格的因子をふくませて問題にされるのに対し、私共の問題にしていることは、勝負よりも知的能力乃至は知的成就度として碁才を見てゆく点であり、この間に若干のずれがあることを断っておきたい。

(注) 棋力の基準である段位は時代によってちがう相対的のものである。大正時代の名人と現在の名人とどちらが強いかということとはできないが、大正時代の初段は名人に三子のハンデキャップで打ったのに対し現在はその差はちぢまっている。即ち専門棋士の最下限は往年に比べはるかに上昇しているといえる。そして専門棋士の採用は棋力次第ではなく、勝負の成績によるから、優秀者が多く競うことになると星のつぶし合いとなり、昇進をはばまれる点は、角力の世界と類似している。

戦前の素人段位は専門棋士のそれと大きな開きはなかったが、現今では全然別箇の基準となっていて素人四・五段が専門棋士の初段に該当するといわれている。

II 研究方法及び手続き

(1) 被験者

被験者は学生囲碁選手権大会選手 昭和37年度30名、38年度29名（地区予選を経て全国から選抜された選手で大学囲碁部の主将クラスで棋力は専門棋士初段に匹敵するものが含まれている。以下学生と略称する）及び日本棋院における棋士養成機関の生徒（18歳以下の青少年で高段者の門弟などのうち有望なものが入学を許され、勝負による研鑽を経てその成績により昇降級をし、毎年一回、上級者は入段試験と称する特別のリーグ戦を行い、その成績優秀なものが専門棋士として巣立ってゆく。以下これらの被験者を院生と略称する）年少組27名〔女4名〕（平均年令 14:6）年長組21名〔女6名〕（平均年令 16:8）であった。その他に予備的考察を行うため身近な素人碁客若干名にテストの被験者になって貰ったことを附記し、感謝の意を表したい。

(2) 実施した調査及びテストについて

以上の被験者を研究室に招致して、種々の調査及びテストを課するということが困難であり、学生の場合は、選手権大会の空白時間を利用し、院生の場合は土・日の稽古日の中での若干時間を割愛して貰い、集団テストを実施した。また個別的に質問表によって郵送回答を求めたり、院生については2年半にわたる棋力の推移（星取表の成績で級位が昇降する）に関する資料を求めたに止まる。

実施したテストは、以下の如くであった。

37年学生：京大 NX₁₅₋ 知能検査

38年学生：空間能力テスト（積木問題、点図形、重合板、折紙パンチ、辿路問題等）及び Y-G性格検査

院生（15歳以下）：NX₉₋₁₅、空間能力テスト、及び Y G 性格検査

院生（15歳以上）：NX₁₅₋、空間能力テスト、及び Y G 性格検査

テスト実施の期間は昭和37年8月から39年6月にわたっている。本来ならば逐次的に報告するのがたて前であるが、要点を理解するためには、結果を要約的に報告した方が効果的と思われるので、ここではテスト名を一括してあげた次第である。そこでこれらのテストが、どのような目的で選ばれたかについて若干の説明を加えておく。

まず私共の目標は、碁才の知的構造をさぐることにあった。そこで私共が試作し、因子構成も明かになっているし、また、応用的研究も積み上げつつある、正常知能者用京大NX知能テストを用いるところからはじめることとした。NX₉₋₁₅、NX₁₅₋ の略称の数字の意味は前者では C.

A. 9歳～15歳に適用、後者では C. A. 15歳以上に適用という意味であり、12のサブテストからなっている。^(注)このテストで探索した結果、私共が空間知能と名付けた因子と碁才との関係が問題になったので、次年度においては、それにかかわる空間能力テストを構成し、これによる分析

(注) 奥野茂夫 苧坂良二：京都大学教育学部紀要Ⅱ

を試みた次第である。このテストは、優秀知能者選別用テスト京大 S. X. 知能テスト及び昭和24・25年度進学適性検査中から、空間知能因子の大きく負荷していると思われる問題を借用し、テスト問題を構成した。このテスト成績については、今回は報告から除外する。現在の段階では、このテストと碁才との関係について有意の結果は得られていない。しかし将来、この被験者達の棋力の推移との間に有意の関連が生じてくるかも知れない。あるいは、またこのテスト実施の際の状況が、充分なるテスト条件ではなかったと反省される点もあり、場合によりこの成績を放棄すべきものかも知れない。

(3) 資料の整理

対照群との比較研究が、この種の研究に常用されるのであるが、この研究の場合は対照群の設定がすこぶる困難である。困難であるというより、どのようにも対照群を設定することができ、むしろ対照群の設定が容易すぎて取捨に迷うというわけである。たとえば私共の被験者に対し、碁が好きだが一向上達しない一群を対照群にすることもできる。あるいは碁というものに全く興味を欠いている一群を対照群にとることもできる。対照群設定の可能性は、いろいろ考えられるにもかかわらず、さてどのような条件を具備した対照群を設定するかという段になると、肝心の碁才についてはまだ皆目判っていないこと、そして我々の被験者については碁がつよいことだけはわかっているが、その他の条件については、調べる予猶がないため、碁才以外の条件を等しくするような対照群の設定は事実上なし得ないことになる。

そこで私共は、この探索的段階において、強いて特定の対照群をおくことにこだわらず、被験者のテスト成績を、そのテストの標準化母集団と比較する方法によった。それにつけ加えて被験者を最近における棋力の上昇率等の基準で2群にわけ、この群間の比較検討を行なって考察を進めることにする。

III 結果の概要ならびに考察

1 知能指数について

知能テストの結果は第1表に示される。

学生の場合は、成人の標準にくらべてはるかに高いが、大学生一般にくらべて差があるとは思

第1表 被験者の平均知能指数

被 験 者	N	I. Q.	Range	
学 生	30	120.0	145 ~ 95	
院 生 (年長)	男	14	105.2	121 ~ 95
	女	7	114.7	125 ~ 97
	全	21	108.3	125 ~ 95
院 生 (年少)	男	22	116.5	132 ~ 95
	女	5	125.6	134 ~ 117
	全	27	118.2	134 ~ 95

えない。そして最高 I. Q. 145 最低95の間にほぼ均等に分布していて、一般大学生から無作為に抽出した標本と変りはないと思われる。

院生の年長群は高校在学中のものが多いがここでも一般高校生にくらべて差をみとめ難い。年少群においては男女共、一般中学生にくらべると、有意の差をもって高い知能指数を示しているといえる。特に例数は少ないが年少群の女子は、どの

群よりも高い値を示している。

これを要するに大学院生を通じて、知能指数の面で普通とされている、I. Q. 90~110の段階か、あるいはそれよりも知能の高い層に属している。このことから囲碁の才能は普通以上の知能が必要だが、格別の高知能を要するものでないことが、推論できる。院生年少群の女子を除いてI. Q. 90代の人が少数含まれていて、しかもこの人達の中には、なかなか有望な打手が観察された。

古川柳にある「あの馬鹿が本因坊に先二つ」のあの馬鹿が、当時知能テストがあったとしてどの程度のI. Q. をいっているのか見当がつかないが、現代の基準であるI. Q. 70以下の精神薄弱者に、本因坊に先とか二子の強い碁の打手が現われようとは思えない。

(2) 知能のプロフィールについて

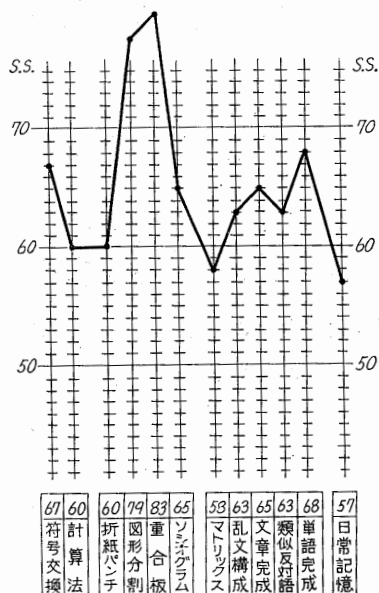
素人が専門棋士について驚嘆することの一つは読みの深さ、すなわち数十手以上に及ぶ着手の手順及びその変化のことごとくを、知覚の世界ではなく、表象の世界で検討しつくす能力である。

専門棋士はこれを読みの深さというより、むしろ不必要なことを検討しようとする無駄な努力を省くために、多くの可能な着手をどんどん捨ててゆく能力で、経験により誰でも到達しうるものとしているが、棋士にとって必須のこの能力は果して習練の結果だけで考えられるものか、素質として空間的關係把握、空間表象力、空間的記憶等の特殊な能力が背後にあると考えるべきか。

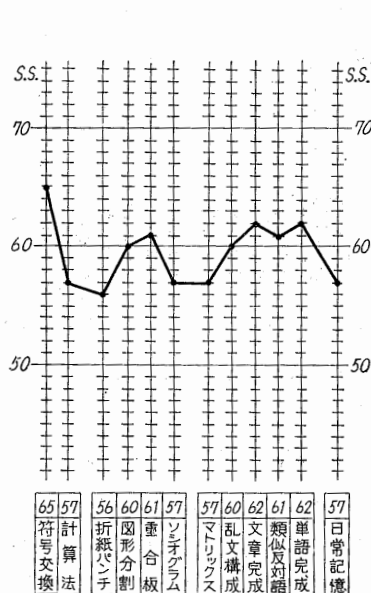
ここでNX知能テストによる知能プロフィールの面で、この特異な能力が何等かの対応を示すかを考察してみよう。

私共は、予備的考察として身近な数人の素人棋士について、このテストを実施したところ、第1図にみられるような、空間知能因子の負荷量の多い下位テストに偏差値70以上が示されるプロ

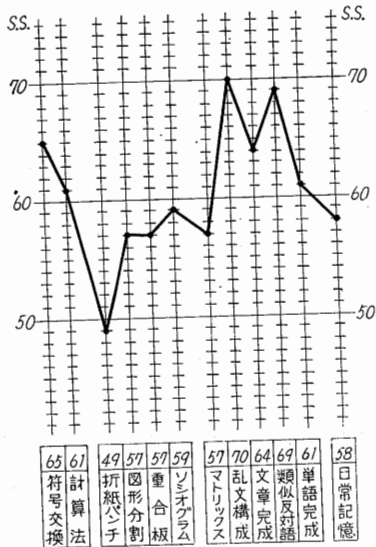
第1図 空間型プロフィール (N君の場合)



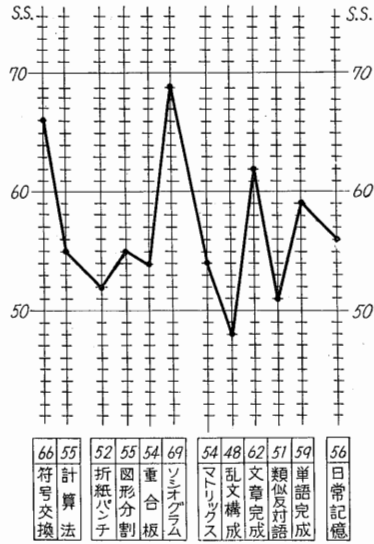
第2図 学生の平均プロフィール N=30



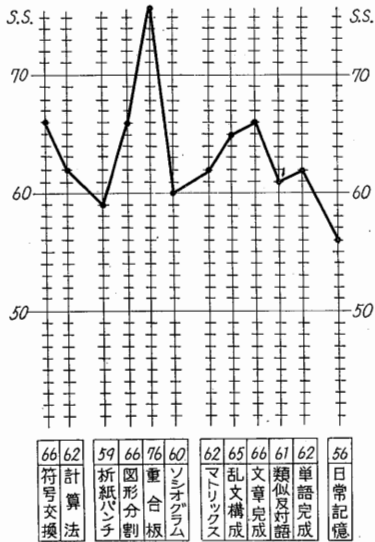
第3図 学生A型プロフィール N=6



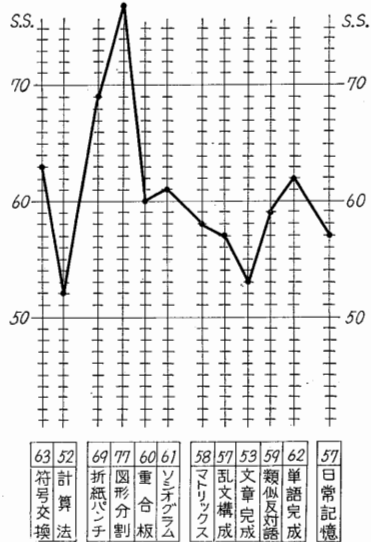
第4図 学生B型プロフィール N=3



第5図 学生C型プロフィール N=3



第6図 学生D型プロフィール N=6



フィール型が得られた。このプロフィール型が、後で検討したところでは工業高校の優秀生等にしばしばあらわれる型であることが判ったのであるが、当時はこれが基才に対応するものではないかと考えた。

このような関心で、学生・院生の知能プロフィールを考察してみた。

37年学生の平均プロフィールは第2図のようになって、平坦化してしまい、全体として特に空間知能の高まりは見られない。しかしたがいに相似的なプロフィールをもっている小人数のグループをつくると第3図～第6図の4類型にわけられる。A型は、空間知能がむしろひくく、かわり

に言語知能の高いグループ、B、C、Dは空間知能のうち一種目「ソシオグラム判読」「図形分割」「重合板」の一種目だけに、高い偏差値を示しているものであった。30名中このようなタイプのいずれかに属するものが18名（言語型6、空間型12名）であり、他は不定型であった。

この結果から、空間知能因子が基才に不可欠の因子と強弁することは出来ないにしても被験者の中に、空間知能に高い偏差値を示すものが多いということでは出来る。

院生の知能プロフィールは、年少群は異なったテストを用いているため、学生と直接的比較はできないが、学生群が小人数グループで相似的プロフィールをもっているのに対し、院生では各人それぞれ異なったプロフィールを示していて、これを平均化すると、数的知能因子の多く負荷した下位テストにかなり高い偏差値がみられた。

学生における空間知能、院生年少群における数的知能の、高い偏差値と基才との関係は、この資料から直接論ずることは危険であるが、数学者に強い棋士が多いこと（これはアメリカにおいても同様だといわれているが）などと考えあわせ、基才を構成する有力な要因ではないかと思われる。

碁の才能者の学業成績について、若干の調査を行なった。学科の好悪、学科の得意不得意という範囲では、必ずしも一義的傾向は認めなかった。対照群を設定してない本研究においては、学生・院生のこの種の資料を比較対照する標準スコアが必要なのであるが、この種のデータは存在しない。ここで言えることは、碁の才能者が学業成績に共通した傾向があることも、特定教科の好悪、得意・不得意の共通性も認め難かった。殊に院生においては学業と囲碁の修業が、相殺的に働いているのではないかと思われる節があった。高校中学の担任の評価では、実力があるのだが、学業にもう一步努力する余地があるという記述が多かった。しかし概して、人格の安定した、よい生徒であるという評価は、後にのべるように院生の一般的傾向としてみとめてよい。

さて、知能プロフィールの検討で、空間知能因子の優位性がみとめられたとはいえ、現実には、これの劣った碁の才能者も散見されるのである。

このことは、囲碁練達に必要な知能因子が直接的なものだということを疑う根拠になる。空間知能の劣勢を、言語知能とくに論理的能力でカバーし、ひけをとらない場合もあると思われる。知能構造が碁の学習・練達に寄与するとすれば、それはその努力に必要な知的エネルギーの節減という形で行われるもので、この道に格別の意欲を生じて精進する努力の効果に、どのくらいの割合で影響をあたえるものかについては何ともいえない。

そもそも、知能テストは素質的な可能性だけを分離して測定できる用具にはなり切っていないのであって、前述の空間知能の負荷しているテストに碁の才能者がよい成績をおさめることは、逆に碁の練習効果がテスト成績に波及したという見方も存在する。この間の関係を明らかにするためには、別に碁の全くの初心者養成するような過程で、攻究しなければなるまい。

(3) 知能テストの誤答率について

専門棋士としろうとの棋力を比較した場合、最も顕著な差となってあらわれるものは読みの正確さであろう。すなわちしろうとには、読みのあやまり、ないしは読みが不十分であることが多

い。それに反して専門家の場合には、読みの誤まりは非常に少なく、また周到な読みの結果、打着点が決定されるようである。碁の読みということについて、野上彰氏は次のようにのべている。

『碁の思考をパターンの記憶に結びつけて説明をした。定石というパターンがある。定石の数は十数万とあるだろうが、まず普通に出てくるパターンは、そんなに多くはなく、せいぜい五、六百ぐらいだろうか。五、六百ぐらいの基本定石のパターンとその変化（それを一つのパターンについて十とみて）五、六千おぼえておけば、あとは応用ができる。その中には特殊なパターンがあって、そのパターンには、一般の基本手筋や形では考えられないのがあり、それは一つ一つユニークなパターンとして記憶しておかなければならない。はじめの手は定石のパターン、布石のパターンをいくつも積み重ねて考えるのである。が、「手どころ」になると一手どころというのは中盤の戦いになって、そこで勝負をきめるようなときに用いられる言葉である。また、死活に関したときもあれば、ヨセに関するときもある—従来の定石、布石のパターンだけではどうにもならず、ヨムという世界にはいるのである。パターンの記憶から、選ぶことを主にして、思考が定石から布石へ進んでいたのが、ヨムという世界にはいると、パターンの記憶、基本の手筋、形の吟味などいろいろ要素が加わるのである。』

このようにして、一局の碁において、各々の打着点は、その局面において可能な数多くの打着点の中から、最も適当であると判断された打着点を選択されるわけである。専門棋士としようとの読みの違い、ないしは棋力の差異は、結局打着点の選択にあると言いかえることが出来るであろう。つまり、専門棋士は、各々の打着点が最適、あるいはそれに近いものを選び得るのに対し、しようとは最適の打着点を選び得ないということになる。そこで、もしこのような態度が知能検査の場合にもみられるとすれば、知能検査を正答の面からみた分析だけでなく、誤答の面からも分析を行なう必要があるように思われる。しかし、単に誤答数のみをとるあげるとは無意味である。なぜならば、個人によって各下位検査の応答数が同じであるとは限らず、したがって、応答数との関連において、誤答数をとるあげると必要がある。そこで、応答数に対する誤答数の比、即ち誤答率を算出し、標準群との比較を試みる。なお誤答率は下の式によって算出した。

$$\text{誤答率} = \frac{\text{誤答数}}{\text{正答数} + \text{誤答数}} \times 100$$

ただし、この場合、問題に手をつけなかったもの、すなわち避答は、誤答とは異質のものであり、誤答数および応答数にはこれを含めないことにした。

このようにして、NX₉₋₁₅ 知能検査によって得られた院生年少群と標準群の誤答率は第2表に示した。また NX₁₅₋ 知能検査によって得られた学生群、院生年長群および標準の誤答率は第3表に示した。

第2表の院生年少群は、男子22名、女子5名合計27名であり、標準群は男子100名、女子100名の合計200名である。第3表の学生群は男子30名であり、院生年長群は男子17名、女子4名の合計21名である。また標準群は男子100名、女子100名の合計200名である。

第2表の結果では、院生年少群の誤答率は各下位検査を通じて、標準群よりも低いことを示し

倉石：棋才の心理学的考察

第2表 平均誤答率の比較 (NX₉₋₁₅) 数字は%

因子	数			空間			言語					記憶
下位検査	符 号 交 換	四 則 計 算	数 字 三 角	重 合 板	折 紙 パン チ	図 形 分 割	乱 文 構 成	マ ト リ ック ス	反 対 語	単 語 完 成	文 章 完 成	日 常 記 憶
院 生 (年少)	4.3	2.3	7.3	15.2	19.6	9.5	19.0	17.8	5.4	1.9	11.5	10.0
標 準	15.6	8.6	20.9	20.4	34.5	30.6	38.3	26.8	12.3	3.2	21.1	16.2

第3表 平均誤答率の比較 (NX₁₅₋) 数字は%

因子	数		空間				言語					記憶
下位検査	符 号 交 換	計 算 法	折 紙 パン チ	図 形 分 割	重 合 板	ソ ン オ グ ラ ム	マ ト リ ック ス	乱 文 構 成	文 章 完 成	類 似 反 対 語	単 語 完 成	日 常 記 憶
学 生	2.6	13.7	28.7	20.2	24.7	16.7	17.5	16.3	7.6	8.0	1.6	21.9
院 生 (年長)	25.1	49.2	29.4	26.6	41.2	45.4	45.2	52.5	15.8	22.0	4.4	37.4
標 準	12.7	43.9	39.6	46.9	39.7	48.6	30.3	30.7	18.4	14.2	4.7	20.7

ている。特に言語系の乱文構成、空間系の図形分割及び折紙パンチ、更に数系の数字三角等では、その差が大きいに思われる。また、院生年少群及び標準群の誤答率の順位について検定を行なったが、 $P < .01$ で統計的に有意な差のあることがみとめられた。すなわち、院生年少群は標準群よりも各下位検査を通じて、低い誤答率を示しているといえることができる。このことは、先に仮定したように、誤まりを避けるという態度が、知能検査の場合にもみられることを示していると考えるもよいであろう。

次に、第3表の結果では、学生群の場合には、標準群よりも全般的にかなり低い誤答率を示している。特に数系の計算法、空間系の図形分割およびソノグラム等の差は顕著である。また、学生群と標準群の誤答率の順位をU検定によって検定した結果、 $P < .01$ で統計的に有意な差のあることがみとめられた。この傾向は、院生年少群の場合と同じである。

更に院生年長群と標準群を比較した場合、以前の二群とは逆に、院生年長群の誤答率は標準群よりも高い傾向のあることが知られる。特に数系の検査及び言語系の検査では、標準群よりも高い傾向にある。しかし空間系の折紙パンチと図形分割では標準群よりも低い。全般的に高い誤答率を示している院生年長群においても、空間系の問題では誤答率が低くなっているということは、棋力と空間的な能力との間に何らかの関連性が存在するのではないかという推測を可能にするよう

に思われる。また、院生の年少群と年長群との誤答率に差異があるが、このことの解釈として、次のような推測をしよう。つまり、年少群は年長群よりも碁の才能に恵まれているからではないか。このことは修業期間をとりあげて考えてみると明らかになるであろう。つまり、年少群は修業期間が約3年であるのに対し、年長群は約4年半修業をしている。このように1年半ほど長く修業しているにもかかわらず、院生として止まっている年長群は、囲碁の才能発現が遅れていると見なしても差支えないであろう。更にもう一つとして、棋力発達の速度にも差があるのではないかとということが考えられる。そこでこの点を明らかにするために、次に棋力発達の面から分析を試みることにしよう。

(4) 棋力の発達と知能について

すでに述べたように、碁の才能はきわめて早期に、その発現をみることがある。また、現在の専門棋士の中で、高段位にある棋士の多くは、すでに少年時代においてかなりの棋力に到達していた。どの程度まで棋力が上昇するかということと、棋力発達の早さとは関連性があるように思われる。そこで、学生群および院生群の棋力発達と知能との関係を分析してみた。

学生群の場合、棋力の判定および、発達の速度を正確に測定することは不可能であるが、次のように考えることによって、大よその発達速度が知られると考える。まず、碁を覚えはじめるときには、棋力はゼロと考えることができるであろう。また、学生囲碁選手権に出場するためにはかなりの棋力を必要とする。たとえ、各選手が同じ棋力であるということをも想定できないとしても、選手間の棋力に大きな差があるとは考えられない。このことは、前年の優勝者が翌年、連勝しえなかった例を見ても、選手の棋力が接近していることがうかがわれるであろう。

次に、院生の棋力とその発達については、すでに述べたように、院生同志の対局の勝敗によって採点され、成績が一定の水準を越える場合、昇級されるのである。したがって、院生の場合には、棋力の判定及びその発達については、かなり正確な基準で測定されていると考えられるであろう。

以上述べたように、学生の棋力発達については、ならいはじめてから現在の棋力に到達した期間の長さを棋力発達の指標とし、院生については、二年半の間に上昇した級位数を棋力発達の指標とした。

第4表 経験年数と知能偏差値との順位相関 (学生)

因子		数	空	間	言	語	記憶	
下 位 検 査	I. Q.	符 計 号 算 交 換 法	折 図 紙 形 パ 重 ン バ 合 ン 分 テ 割 チ 板	ソ ン オ グ ラ ム	マ ト リ グ ス	乱 文 文 章 構 成 成 成	単 語 完 成 完 成 完 成	日 常 記 憶
相関係数	.48 ※	.19 .61 ※※	.12 .38 .00 .65 ※※	.30 .17 .31 .22 -.05	.29			

学生、院生年少群の知能の順位と棋力発達の順位との順位相関を求めた結果は第4表及び第5表に示した。

第4表は学生18名の場合であるが、碁

※ P<.05 ※※P<.01

を覚えてからの期間，すなわち経験年数の順位と知能指数の順位との間には，統計的に有意な相関のあることがみとめられた。また，下位検査との間に有意な相関のあることがみとめられたのは，数系の計算法，空間系のソシオグラム判読検査においてである。

第5表 棋力発達と知能偏差値との順位相関（院生年少）

因子		数	空間	言語	記憶
下位検査	I. Q.	符四数 号則字 交計三 換算角	重折図 合紙形 パン分 板チ割	乱マ反単文 文トリ語章 構対語完完 成ス語成成	日常記憶
相関係数	.47	.23 .43 .05	.25 .56 .30 ※	.51 .52 .20 .00 .34 ※ ※	.31

第5表の院生年少群16名の場合には，昇級数の順位と知能指数の順位との間には，有意な相関はみとめられなかった。しかし下位検査の空間系の折紙パンチ及び言語系の乱文構成とマトリックスには有意な相関のあることがみとめられた。

次に院生について，棋力発達の速度と知能指数との関係を検討してみよう。この分析においては，年長，年少群をあわせて，2年半の間に上昇した級数によって3段階に分け，4級以上の昇級者7名をH群とし，3級の昇級者10名をM群とし，2級以下の昇級者9名をL群として，知能指数の平均値を示したものが第6表である。

この結果に示されたように，昇級の程度の高いものは知能指数も高いことが知られる。

第6表 棋力発達と知能指数（院生）

	H	M	L
I. Q.	120.1	115.1	113.4
平均昇級 (級)	5.1	3.0	1.7
N	7	10	9

しかし，これらの三群の平均値をt検定によって検定した結果，いずれの群間にも統計的に有意な差をみとめることはできなかった。統計的には有意な差をみとめることはできなかったが，昇級の程度が低くなるにしたが

って知能指数も下降していく傾向があるということは，棋力発達と知能指数との間に関連性が存在することを推測させる。ただその関連の程度およびNX知能検査によって測定されている知能因子のいずれと関連するかという点については，これまでの資料からは決定できないが，棋力発達の面においても，他の学習と同様に知能の要因が関与しているとは言えるであろう。

次に，誤答率の場合に推測された，年少群と年長群の棋力発達について分析をしよう。

被験者は37年から39年まで在院しているもので，更にNX知能検査を受けているものである。その間入段したもの，あるいは院生としての修業を中止したものを除くと年少群16名，年長群10名という人数になった。これらの被験者について，

第7表 院生の棋力発達と知能

	I. Q.	37年	39年	上昇級
年少	118.2	7.6	4.1	3.5級
年長	111.9	8.4	5.9	2.5級

知能指数，37年度の棋力及び39年度の棋力，その間の昇級の程度を示したものが第7表である。

第7表に示されたように，年少群の方が年長群よりも知能指数が高い傾向を示し，昇級の程度

も年少群の方が年長群よりも大である。これらの傾向は、統計的には有意であるとはいえないが、誤答率の場合に推測したことがらが誤っていないという論証となるであろう。

(5) 性格について

「碁は性格をあらわす」とよくいわれる。この言葉は打着点の選択傾向に、その性格が反映されていることを示すものであるのか、また単に対局中の無意識的な行動によって性格が察知されることを示しているのかつまびらかではない。たとえその何れかであることを断じ得たとしても、それは本研究の意義を考えた場合、それ程重要性をもたないことであろう。それよりも、知能の面では全く平凡な個人が、囲碁という特殊な能力に優れていることによって、情緒的な安定等を得ているというようなことを見出す方がより重要な意義をもつものであると考える。そこで碁才に恵まれた被験者について性格検査を実施し、いかなる性格を示すかという点を明らかにすることは興味ある問題となる。われわれは、昭和38年、仙台において学生囲碁選手権が開催されたとき、参加選手32名を被験者として、Y-G 性格検査を施行した。また、昭和39年院生年長群及び年少群に郵送法によって Y-G 性格検査を実施した。しかし回送されたものは8名で、統計的処理を行なう上に、あるいは院生群についての一般論を導く上においては少ない資料であったが、一応参考として結果を報告する。

第8表は上記の被験者の Y-G 性格検査の各項目についての得点の平均値を示したものである。

第8表 院生・学生の得点の比較

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
学 生 (N=29)	10.9	10.6	6.9	7.9	7.5	7.4	10.9	12.6	10.7	12.1	8.7	8.6
院 生 (N=8)	7.5	9.1	5.1	7.8	6.4	7.5	11.3	13.0	9.0	12.0	9.5	7.8
標 準	11.2	9.9	8.9	9.7	8.1	8.3	10.8	10.8	9.9	11.8	11.4	9.7

この結果から標準群と差があるとみとめられた項目は I (劣等感) で学生、院生ともに標準群よりも低い値を示している。つまり棋力に恵まれているものの劣等感は普通の人よりも劣等感が少ないという結果を示している。更に学生の場合、A (支配性) の得点が低いが、これは普通の人よりも支配性が大であることを示す。また院生群では D (抑うつ性) の得点が低い。これは院生群は明るい性格で抑うつ性が小さいことを示している。

学生、院生群に共通する点は、劣等感が少ないことで、一局の勝敗を争う場合、相手に対して劣等感を抱かないこと、勝利の確信をもつこと等の特徴があらわれているのではないかと考えられる。勝負の世界では、よく勝負根性をもっていることの重要さが強調されるが、この勝負根性という言葉を心理学的に言いかえれば、劣等感が小で、支配性が大きく、情緒的にも安定しているような性格を言うのであろうか。

なお、院生の在籍している中学校及び高等学校に質問紙を送って調査した結果、院生はきわめて正常な学校生活を送っていること、更に大部分が明朗、快活で情緒的にも安定していると報告

されている。このことは Y-G 性格検査によって得られた結果と一致するようである。しかし、このように劣等感が少ない等の特徴は、たまたまそのような人が碁に強くなっただけのことか、それとも碁が強くなるに従って、劣等感も減少していったものか現在の段階では断定し難い。

Ⅳ 要 約

特殊才能に関する研究の一環として、囲碁の才能をとりあげ、心理学的な分析を試みることを目的とした。

被験者は学生囲碁選手権大会に参加した選手で、昭和37年度30名、昭和38年度29名及び日本棋院の棋士養生機関の生徒48名である。

実施した検査は、37年度学生については、NX₁₅₋ 知能検査、38年度学生については空間能力テスト及び Y-G 性格検査である。また院生については、NX₉₋₁₅ 知能検査、NX₁₅₋ 知能検査、空間能力テスト、Y-G 性格検査である。

テスト実施の期間は昭和37年8月より昭和39年6月にわたる。

知能指数に関して、学生の場合は成人の標準よりもはるかに高いが、大学生一般にくらべると差があるとは思われない。院生年長群の場合も一般高校生に比して差をみとめ難い。院生年少群については、一般中学生よりも高い傾向がある。

また、知能プロフィールの面では学生の場合には類型化が可能であったが、院生群では類型化を行なうことは出来なかった。

知能検査にみられた誤答率に関して、学生及び院生年少群は標準群よりも低い誤答率を示した。しかし院生年長群については空間系の検査を除き標準群よりも高い誤答率を示す傾向があった。

碁力発達と知能に関して、学生、院生ともに知能指数が高い程、碁力発達も早いという傾向がみとめられた。

性格について、学生、院生群の特徴として劣等感が少ないことがみとめられた。更に学生の場合には支配性が大きく、院生の場合には抑うつ性が小であった。これらの特徴は勝負強さという概念の心理学的な説明となるのではないかと考えられる。

これを要するに、碁の才能者と目される人々について、若干の心理学的分析を試みたが、碁の本質を端的な形で指摘することは、できなかった。しかし上述の結果が、今後の探索の足掛りになりうるならば望外の幸としたい。

最後にこの研究に便宜をはかって下さった、また、数々の助言を与えて下さった日本棋院京都本部の藤田梧郎六段、広島大学理学部の吉田紀雄教授、日本棋院養成部主任 門田竹四氏、ならびに学生囲碁連盟代表幹事 土橋英照君をはじめ研究に御協力いただいた学生囲碁選手権大会の参加者及び院生の方々に厚くお礼申し上げます。